

湘南オープンウオータースイミング2013 (2.5キロの部)

期日／8月25日 (コース-----七里ヶ浜～江ノ島)

年齢の高い順番で数えると625名中16番である。お年寄りは素晴らしい！
なかなかやるもんだ。どこまでも頑張る年寄りがいるもんだ。

トップに躍り出るのは大変なことだが、予定通り歳を重ねれば13年後にトップか。
今回、スタート前の整列のなかでガッシリした体格の服部陽一氏が「私が最高齢です」と言われた時、スタート直前だというのに、周りから賞賛のどよめきと、握手攻めにあっている光景が素敵だ。

年齢順位 (抜粋)

- 1位 79歳／「服部陽一」 タイム：1時間19分43秒 (すばらしい)
- 2位 78歳／「不破俊次」 タイム：1時間26分34秒 (制限タイムに近い)
- 14位 69歳／「安田玲子」 タイム：1時間12分8秒 (女子の部最高齢)
- 15位 68歳／「藤田昌博」 タイム：56分2秒 (すごくはやい)
- 16位 66歳／「三枝樹真」 タイム：1時間4分7秒 (少し早い)

総合タイム順位 (抜粋)

- 1位 45歳／「杉沢毅志」 タイム34分14秒 (若手を完全に押さえたね)
- 172位 11歳／「佐藤翔」 タイム50分25秒 (最年少) (一寸法師)

9月も終わりに近づき、我が家の庭にも紅葉がみられる。

私の好きな暑い夏にも、いつか終わりが来る。淋しい。

「夏過ぎて、秋来るらし、うろたえる」と言ったところか。「10月は黄昏の国」もう夏とは呼べない。

8月に入り、朝5時30分に目覚まし時計のベルが鳴る。朦朧とした体をベットから押し出し朝が始まる。自転車に乗り、海に向かう。

準備体操もないまま海のなかへ入り、沖に向かって泳ぐ。15分が過ぎる辺りで身体もしだいに目覚めてくる。左に折れ江ノ島に向かう。この辺りで身体は目覚め、泳ぎは絶好調ムードに入ってくる。泳ぐというより飛ぶ感じ。トビウオのようだ。30分が過ぎた辺りでUターンをする。左手の波間に漂う「烏帽子岩」を確認しながらスピードをアップする。

元の海域に戻りながらも、調子がいい時はさらに前進。そして戻りのコースに入る。

浜に向かう波に乗りながら、す～いす～いと浜に向かう。

サーファーの群がる辺りまで来ると、波は一段と高くなり、波が来る度スピードを上げ、波に乗りながら一気にすすむ。ビッグウエーブに身体を預け乗っかかる。

大ジャンプ！一気に浜に接近。さらに大きな波が来れば浜にたたきつけられ終了。

約1時間のスイミングを毎日続けた。8月が過ぎ、9月も終わりを迎えようとしていた。明け方は涼しくなり、長袖にウインドブレーカーを羽織らなければ自転車では寒い。

寒いのは苦手なので全速力で走る。早く走ればさらに冷たい風が身にしみる。

裸で外にいるのは寒い、海のなかに一步踏み出せばあったか〜い。

まだまだクラゲ達あっちこっちいるが、もうお友達なので仲良く泳いでいこう。

生きるということは、仲良く共存することなのだから。

9月の終わり、今朝の寒さはどうしたことか、泳ぎながらも海から出ている肩口が強い北風にさらされ寒いぞ。昨日より5度ほど気温は下がっているようだ。

輝く日の出が海面を染める美しさは素晴らしい。海の青さと海面を漂う朝日がキラキラまばゆい。ちりばめられたダイヤのようだ。

8月の半ばにはクラゲに刺され、痛いめにもあったが、いま思えば蚊に刺されたようなものだ。

果てしなくつづく魚の大軍に出会ったり、クラゲの大群に往くてを阻まれたり、カモメの集団のなかに分け入り、水の中からかわいいカモメの足にほほえんだり今年を楽しんだ。

ボラのジャンプに驚かされたり、漁師の引き網に入れられ、なんだこれは、外道だ！邪魔だ！と捨てられる。

10月も半ばをむかえようとしているのに気温は30度近い。真夏の暑さがつづく。

台風が連続してやってくる。風が強く、海が荒れ始めてきた。今年の夏はいつもとちがう。雨の日も多く、なかなか泳ぐには適さない。

秋が来たかと思っていたら、再び夏がやってきた。そして一気に冬がくる。

今年の8月、夏はとりわけ暑い日が続き、列島では大雨や渇水もあったが、風のない日も多かった。

早朝の海は静かな湖面のような穏やかさが続いた。泳ぐのにこれほど快いことはない。

ウォーターマンになった私は右に左に波に身を任せ、時の経つのも忘れ泳ぐ。

気づけばずいぶん時間が過ぎていた。竜宮城に行ってくるとはこういうことだったのかと、老境の身になって知ることとなった。

前回、セイトカアワダチソウ氏の話題をしたが、いよいよその時期が近づいてきた。今夏も垣根越しに覗いてみれば、野草を老木に見立て、盆栽いじりをしておられる。

身体にしびれが出て、山登りはおろか海にも出られないそうだ。心配だ。

最近セイトカアワダチソウを見かけなくなった。どうしたのだろう。あれだけ一世風靡したのに、どうしたのだろう。

先日、セイトカアワダチソウ氏から「身体にしびれは有りますか？」と聞かれ、「今、人生にしびれています」と答えてバカにされたが、他人の痛みはわからないものだ。

すっかり元気をなくし、山にも出かけられないセイトカアワダチソウ氏ですが、早く良くなってほしい。

通りを行く人に扉越しにホースで水をかけ、ひゃーひゃー言わせる意地悪じいさんになってほしいものである。

さて湘南オープンウォータースイミング2013年がいよいよ始まった。

昨年台風のため中止になってしまったが、今年はどうだろう。

朝から降ったりやんだり、どしゃ降りになったり、ひどい天気だ。

江ノ島までの約7キロは雨合羽にゴムゾウリの見苦しいスタイルのまま自転車で走る。見栄えは悪い。江ノ島からは江の電に乗り換え、七里ヶ浜駅で降りる。

天候は不順だが順次スタートはきられているようだ。2.5キロの参加者625名が年齢別4つのカテゴリーに分けられスタートが切られている。

私のグループは小学生、中学生、女性及び60歳以上男子。

小学生というのは小さいと書くぐらいだから、本当に小さい奴がいる。

足なんぞ細めの人参か、ごぼうである。お椀に乗っていても違和感が全然ないぐらいの情けない小ささである。お箸でくるくる、くるりんこ掻き混ぜたくなってしまう。

ちよいとつまんで海の中へちゃぽ〜ん。このぐらい小さいのが数人いたら**まぜまぜ**井ができそう。想像してるだけ楽しくなってしまう小ささである。手元の参加者記録によれば11歳の子がいる。

こういう小さいのが早かったりするんだらうな〜。泳いでいる途中で出くわしたら足をつんつんしたり、ちょっと引っ張ってみよう。驚いて逃げるだろ〜か。

泳ぎは速いかもしれないだろうけど、人生経験が浅いから、さあ〜どうするだろう。

人生の戦いをしっかり教えておかないと、大きくなってから苦労するに違いないから。老婆心ながら私をご指導いたしましょう。

いよいよスタート前の整列が始まり、お隣の老人ともご挨拶。

人数が合わないらしく、なかなかスタートできない。小雨だったのがどしゃ降りに変わり寒い。海の水は暖かいのに雨は冷たい。周りの選手の皆さんに聞いてみると、海では年に1、2度しか泳いだことがないそうだ。私の場合はプールに行くのは年に1、2回。6月から11月始めまでが泳ぎの期間である。11月から4月がランニングの時期となる。

おっと、いよいよスタートが切られた。

お椀に乗った小人も、79歳のガッツリ老人も一斉にスタートだ。

蹴ったり、蹴られたり、人の背中に手をのせる奴やら、足を引っ張る奴やら、もみくちゃで泳ぐ。というよりつかみ合い。こんなバトルが300〜400メートルは続く。早い順に泳いでいる訳ではないので、しばらくは激しい渋滞が続くのは必然。

さらにはコースが一直線で500メートル先の黄色のブイを右に回るまでは避ける場所がない。インコースをとって泳いでいる私は、更なるせめぎ合いがつづく。板塀の中をぎっしりつまったスイマーが、じたばた暴れている感じである。その姿は痛ましい。

スタート時の疑問であるが、マラソン大会のスタートのようにタイムの速い順にスタートラインに並ばせる事ができないのだろうか。スムーズなスタートとなると思うのだが。

しかし「袖擦れ合うも何かの縁」と思えばそれもよいか。

隣で競り合っているスイマーが、私の肩口に手をかけて前に出ようともがく。避けようにも前のスイマーの足が邪魔で出られない。

後方からも私の身体に乗っからんばかりに追い込んでくる。若い力をどうかわすか。困る。

やられっぱなしの私。やられたらやり返す。倍返し、といきたいが、やられてからでは遅すぎる。やられる前にやっちゃまえ！。

善良な市民が善良でなくなる日のような狂乱ファイトの連続である。

今日もうねりも高く、サーフィンにはもってこいの波。こんななかで私達は喘いでいるのだ。もみ合いながらの泳ぎは迫力満点だがこれもいつかは終わる。

やっそこさつとこ、芋洗いの洗礼が終わり、黄色のブイにたどり着く。黄色のブイを右に折れれば、後は江ノ島の灯台を目指して一直線。水もきれい。魚はいないがクラゲは見える。

水もきれいで、細く白っぽい足が私の左右をぱたぱた進んでいる。これは若い足だな。若鮎のようだ。でもさっき、スタート前に見かけた小学生ではないな。お腕を持っていないし、箸もない。

相変わらず私の周りにスイマーは多いが、やっとなスピードが同じぐらいの流れで軍団が構成され始める。今年は海に身体がなじんでいる、海全体が見えている感じで泳いでいて気分がいい。

海のうねりに合わせ、スピードがグ〜イグ〜イのっているようだ。

気分がいいのでぐいぐいと追い越し始める。左前方に江ノ島の灯台も確認できる。コース取りも申し分ない。最高のコース取りである。

過去の試合では目標物が全く確認できないまま不安を抱きながら泳いでいたものだが、今年はどうしたことか？調子がいいぞ。

青い海を真っ二つ。ぶった切るように泳ぐうち、突然行く手を阻まれる。「給水される方はどうぞ！」と叫んでいる。給水所があったのだ全く気づかなかったな〜。

マラソン大会の給水ではいつもお世話になるが、泳ぎの給水所に出会ったのは初めてだ。

海の上で横一列、ロープでつないだ浮きに乗ったお姐さん達がコップに入った水を配っている。水はいらないし邪魔である。前に進むにはどうしたらいいの？水を飲んでる人にぶつかりながら考える。大きく迂回をしてクリアーしようとする、浮きの間を通過して下さい！。と叫んでいる。問題は浮き同士を止めている2本のロープが邪魔に見えることである。

世の中の仕組みはややこしいものだ。

前もって給水の仕方、仕組みを絵柄入り説明書で解説して欲しいものである。

そもそも給水の必要が本当にあるのかな？海水でもとりあえず飲んでおけば済むような気がする。1時間程度のことなんだから。

邪魔な給水場所はボラやトビウオのようにハイジャンプで一気に進みたいものだ。

トビウオのジャンプは飛び過ぎで、着水時に腹を打ち付けそうなので、ボラぐらいのジャンプがいいかもしれない。

しかし、給水所があったということは、ここは中間点？残り半分？。急げ！ウオーターマン！泳ぎにムチが入る。

2.5キロ。そこそこに波が立って、うねりもある状態でのスイミングは簡単なようで、うまく波に合わせないと手強い。

太平洋は広い。我らの存在はチリやかすみのごとくちっぽけだ。わずか2.5キロのスイ

ミング大会は小さすぎる。

それでも私は死力を尽くし2.5キロを泳ぐ。これは日本最大のオープンウォータースイミング大会なのだから。ゆっくり泳げば楽しい距離なんだが、1秒でも早く泳ぐとなると生死をかけた戦いになる。そこが素晴らしい。

9月30日の天声人語を読んでいると、こんなことが書かれていた。人工物として初めて太陽系を出たボイジャー1号は、異星人に人類を紹介するレコードを積んでいる。そのなかでバッハの曲は宇宙物理学者の佐治晴夫さん（78）が提案した。

悠久の宇宙と人間を比べ、「一人の人生の中で完結できないことを背負いながら人は生きている、とボイジャーは教えてくれる」と書いている。ボイジャーは今も宇宙を飛び続けているようだ。

佐治晴夫氏は絵の批評でも宇宙の原理が出てくる。この絵は宇宙の原理に合致する構成で描かれていて素晴らしい。というお褒めの批評。

20歳頃ご自宅にお邪魔した時のお話も、分かりやすく、おもしろい話題満載であったが、音楽への造詣も深い。パイプオルガンを奏でて宇宙と交歓する話が出てくる。

当時まだ32歳程だと思うがバッハの曲や、各国の言語や情報を積んで宇宙の生命体との交信ができるようレコードを積み込んでもらうよう話が進んでいる、と話された。あまりに遠大な話なのでSFマガジンの話のように聞き流した。

その時の佐治さんの愛車がオースチン。お医者さんが乗っていきそうな、その当時としてもレトロな車だ。その後オースチンを見かける度に思い出す。

しかしエンジンはロールスロイスのエンジンに取り替え、すこぶる強力。長い坂道をすいすい登る。

問題は最少旋回半径がすこぶる悪いので狭い道での切り返しが難しい。この車どうですか？と言われ、お金もないが、考え込んでしまう。このぐらい身近な話題だと分かりやすいのだが。

佐治さんの出された本の中に「ゆらぎの不思議」がある。

光はまっすぐ一直線に進むと思っていたら、進む道を選んでいくそうだ。本当か！

以下引用文である。

「どうして星はまたたくのだろうか？それは大気がゆらゆらしているからなのです。

つまり、かすかな風や、温度の変化によって、大気がゆらゆらすると、密度の大きいところや小さいところできて、星からやってくる光の道筋が変わるからなのです。私たちだって道のない山道を歩きなさいと言われてたら、木や石ころのないところを選んでいくでしょう？光も同じで、密度が大きくてゆっくりしか走れないところより、密度が小さくて、速く走れそうなところを選んで進みます。だからきまった位置から見ていると、星の位置はかわらなくても、その方向からやってくる光の量がふえたり、へったりするように見えて”またたく”のです。光も私たち人間みたいに道を選ぶなんておもしろいですね。光も人間も、もとはと言えば「宇宙のひとかけら」だからこそ同じような自然界の法則にしたがっているのでしょう。」以下不思議な話話が延々とつづくのだ。

自然界の法則も気軽にとらえ、自分流にそれを確立すれば頂点が見えてくる。と言ったところか。自然流はいい。私の泳ぎがまっすぐでないのも、なるほど自然界の法則にした

がっていたのか。最近目眩が時々するが、これもゆらぎとして楽しもう。

あれから何年になるだろう。いつまでボイジャーは飛び続けるのか？

私はいつまで泳ぎ続けられるのだろうか？

さてレースに戻って、給水所を過ぎた辺りからはスイマーの速度もほぼ一定の流れの中で進んでいく。江ノ島は大きく迫っているように見えるけれど、ゴールに向かう黄色のブイはどの辺りだろう。周りのスイマーの泳ぎはきれいだ。スピードも安定している。

私の調子もいいようなのでピッチを上げて追い抜きをかけ始める。わずかではあるが頭一つ、やがて身体半分とギリギリリードを広げていく。このわずかのスピードアップがしばらく続くと、心拍数もやがて安定してリズムカルな泳ぎになってくる。このペース配分が難しいが無理もできない。

やがて太もも辺りに違和感が感じられるぞ。突っ張ったような嫌な感触だ。前回ふくらはぎが突っ張ってきてクロールのバタ足が効かなくなりあせったものだ。今回は太もも辺りの突っ張りがひどい。

今回はここまでか。平泳ぎに切り替えて様子を見たり、内股をさすりながら調整を計っていると、さっき抜いたスイマーが近づいてくる。せっかく抜いたばかりなのに悔しいなと思いつつペースを落とす。

再びクロールに切り替え泳いでみる。やはり練習不足なのだろう。プールでの練習と違い、海では最大限の力を振り絞って泳ぎの練習はできない。沖の方で一人で泳ぐということは不測の事態が起きた時に岸まで自力で戻らねばならない。常に2～3割の余力を残しておかなければならないからだ。

海の中で、問題が生じて、自分で直しながら前に進む訳である。

今回もほんのわずかのロスであったが、しばらくして突っ張りが癒えてくる、再び前進。前進。不安を抱えながらではあるが、なんとか流れにのって快調に泳ぎはじめる。

やがて確認はできないが、黄色のブイが近づいてくる感触が周りに漂う。お魚の群れのようなざわめき感が辺りをおおう。ライフガードの群れがあちらこちらに見えてくる。

江ノ島の岩肌もチラットと見えている。左手前方はヨットハーバー。この海域はよくヨットの練習で出航してきたものだ。

すっかり足のツッパリも癒えてきて、絶好のコンディションのまま黄色のブイをひよいと回る。ここからはゴールに向けて一直線のはずだ。ゴールまではまだまだ遠いが、ブイを回ったスイマー達は全員が勢いづいている気がする。

人間気持ちの持ち方一つで人生変わるといえるが、全員やる気満々に切り替わると、抜きたくても抜けない。抜かれるなんて許せない、といった感じが水面から伝わってくる。

江ノ島の海水浴場は大にぎわいだ。人が密集していて、どこにゴールのマークがあるのか分からない

しかし前回迷いながら目指したゴールの位置の記憶がよみがえってきた。浜のやや右寄りだったな。最後の力を振り絞り突き進む。

ゴールが見えてくると疲れた身体にも更なる力が沸き上がってくる。貧しかった少年時代に培われたハングリー精神の名残りかもしれない。コロケ一個でご飯3杯！である。

そして、浜に乗り上げるように到着するも、ここで終わりではない。前にふらつくおじ

さんをエイヤー！と追い越してゴールの電気板のようなものを踏みつける。

そして前に進むと若い女性が首にメダルを掛けてくれる。キスはない。

1時間4分7秒。前回の記録を12分近く短縮。はやい！

毎年12分短縮すると。3年後のオリンピックも夢でない。

こまかいことで大喜びするこの快感。広い宇宙の片隅でこれほどまでに大きなことを成し遂げた喜び、誰にも気づかれないままに終わる喜びがある。もし、いつか誰かに気づかれても素知らぬ顔で通り過ぎるとしよう。

本当にチリや、かすみのようなことなんだから。